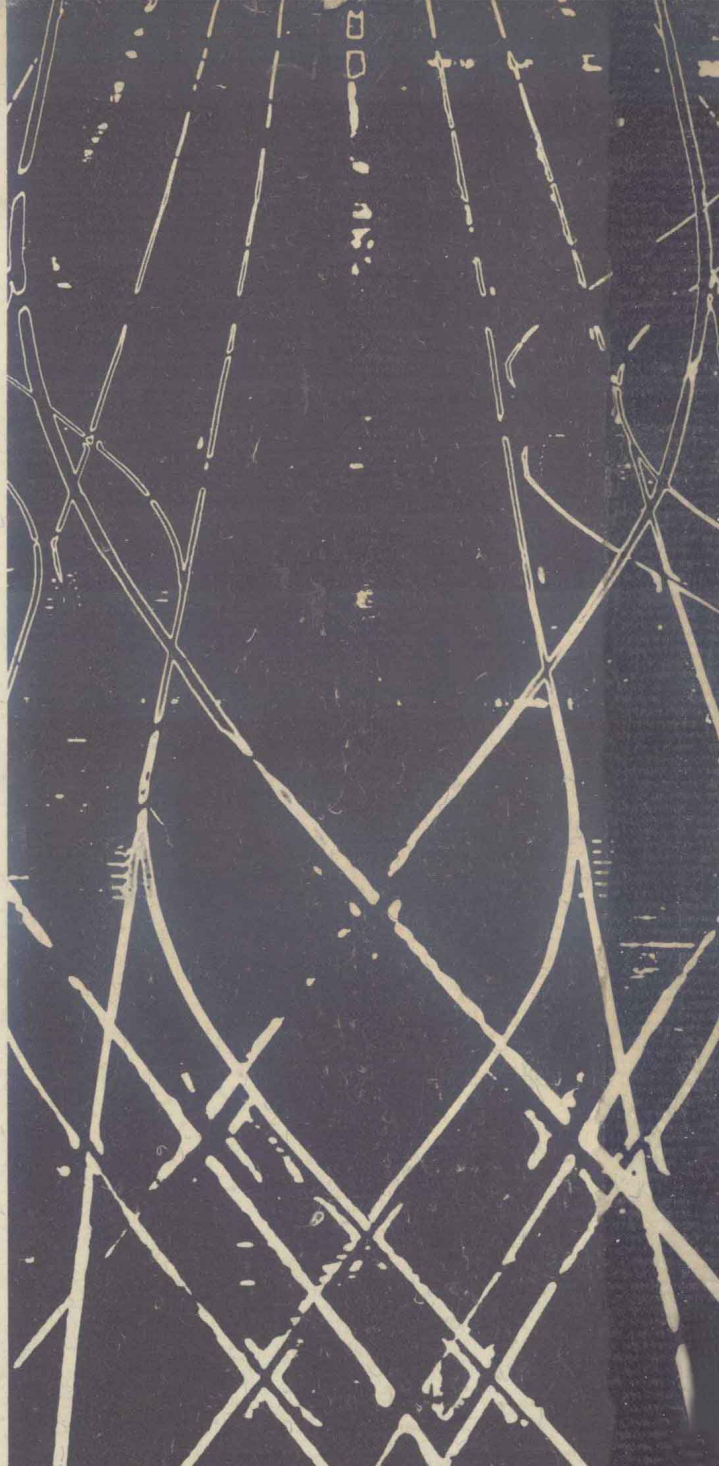


結城昌治

殺意の軌跡



結城昌治

殺意の軌跡

中央公論社

殺意の軌跡

定価五八〇円

昭和四十八年四月十五日印刷
昭和四十八年四月二十五日発行

著者 結城昌治

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

◎一九七三 検印廃止

目次

殺意の軌跡

白い仮面

燃えつきた影

七人目

非業の夜

闇の中

暗い恋人

◇

赤い弔花

253

211

177

133

117

63

33

5

小説集

殺意の軌跡

殺意の軌跡

母親の供述

——あたしはテル江に一年以上会っていませんでした。いったい何処で何をしているのか、手紙くらいくれてもよさそうなものと思って心配していたのです。それがあんな姿になって、あたしこそ死んでしまいたい気持です。ほんとに、あの子は誰に殺されたのでしょうか。これで、あたしはひとりぼっちになりました。身寄り頼りもありません。薄情な姉がいますけど、縁を切ったも同然で十年あまり経ちます。

テル江は気立てのやさしい子でした。あたしがテル江を生んだのが二十歳ですから、ちょうど今のテル江と同じです。もともと体が弱かった主人は、それから二年ほどで亡くなりましたが、あたしはテル江のために、再婚なんて考えたこともありません。その頃はまだ仲のよかった姉のところへテル江を預け、ほんとうにどんな辛い仕事でも我慢して働きました。今でも病院の付添婦で、決して楽になったなど言えませんが、あたしはテル江のためだけを思って生きてきたようなものです。もしテル江さえいなかったら、あたしはどれほど安楽に暮らしていたかと思えます。大きな衣料

品問屋の息子さんに見染められたことがありますし、その人のお名前は言えませんが、当時は県の議員さん、今は国会で活躍されている方からぜひ後妻になって欲しいと頭を下げられたこともあります。でも、あたしはみんなお断りしました。テル江が不憫ふびんでたまらなかつたからです。テル江が、あたしと二人きりで暮すのがいちばんいいと言ったからです。テル江は人見知りをする子で、よその人にはなかなかつかない子でした。

あたしは一所懸命に働き、テル江をいじけないように育てたつもりです。父親がいなくて寂しかったでしょうが、惨めな思いだけはさせなかつたつもりです。

お陰さまで、テル江は素直な明るい子に育ちました。色の白いのはあたしに似たようですが、目鼻立ちは父親にそっくりです。友だちのいたずらで美人コンテストに出場させられ、ミス何とかに選ばれたこともあります。でも、テル江はそんなことで浮うつくような娘とは違います。まわりからちやほやされても、かえってそういう人たちを嫌っているふうでした。真面目一方で、男の友だちと遊び歩くようなこともしません。静かに本を読んだり、刺繡ししゅうをしたりしているのが好きな子でした。あたしに逆らったことなどは一度もありません。親思いで、心のやさしい娘だったので。あたしが疲れたと言えば、一時間でも二時間でも肩や腰を揉もんでくれました。

そのテル江をあたしから奪うばったのは、一ノ瀬という男です。一ノ瀬利春、病院のレントゲン技師をしていた男です。あたしより三つ年上ですが、割合若く見えるので、本当の年を知らない人には十歳くらい若く言っていました。口が上手うまくて如才うまいがなくて、世間知らずのテル江を騙だますことなど赤子の手をひねるようなものだったと思います。あたしが気づいたときはすっかり一ノ瀬に騙だまされ

ていて、もう何を言っても、テル江はあたしの言うことが耳に入らなくなっていました。物事を一途に思いつめてしまふ性質で、可哀相なほど男を信じ切っていたのです。それに、あたしが別れさせようとすると、一ノ瀬は悪態をついて暴力まで振ります。あたしはどうしたらいいか分らないで、おろおろするばかりでした。

その頃、あたしはほかの病院で働き、テル江は一ノ瀬と同じ病院の看護婦をしていました。小さいときから看護婦になるのが夢だったのです。中学のあと看護婦の学校へ二年間通って准看護婦になり、病院へ勤めながら正式の看護婦になる勉強をしているうちに、一ノ瀬に引つかかってしまったのです。不運といって諦めることは出来ません。一ノ瀬のためにテル江は一生を台なしにされ、あたしの生活まで滅茶苦茶にされました。あたしはもう生きてゆく張合いがありません。

——テル江さんが一ノ瀬と別れたのは、なぜですか。

——一ノ瀬のおくさんが子供をつれて、一ノ瀬のアパートへ訪ねてきたからです。それまでは、一ノ瀬におくさんや子供がいるなんてあたしも知りませんでした。結婚したことはあるけれど、おくさんに死に別れたと聞いていたのです。一ノ瀬はまるで出稼ぎのひとが蒸発したように、おくさんや子供を熊本に放っておいて、送金もしなかったらしく、おくさんはあちこち聞き歩いてようやく探し当てたようでした。子供は瘦せた女の子で、四つか五つくらいだったと思います。おくさんは太っていました。一ノ瀬はさすがに弁解の仕様がなかったと見えて顔をそむけ、おくさんが泣き出すと子供まで泣き出して、テル江も気が狂ったようになってしまい、偶然あたしとその場に居合せなかったら、どうなったか分かりません。テル江は泣きながら部屋を飛び出し、それっきりあた

しのところへも帰らなかったのです。

——妻子のほうはどうしましたか。

——直接聞いたわけじゃありませんが、一ノ瀬に愛想をつかし、子供といっしょに熊本へ帰ったそうです。ちゃんと離婚届を用意してきて、一ノ瀬に判を押させ、院長先生に証人になってもらったという話を聞きました。気の毒なおくさんですが、ことによると熊本の方に好きな相手が出来て、その男といっしょになるため、初めから離婚届に判を押させる気で、一ノ瀬を探していたのではないかという話も聞きました。

——誰に聞いたんですか。

——院長先生のお宅の女中さんです。女中さんは院長先生のおくさんから聞いたそうです。とにかく一ノ瀬は、いろんなことがバレて体裁が悪くなったのでしょう。それから間もなく病院を辞め、アパートを引払って何処かへ行ってしまいました。

——何処へ行ったのだろう。

——知りません。それ以来あたしは一ノ瀬に会っていないのです。

——テル江さんのあとを追って行ったとは思いませんか。

——そんなはずはありません。それから半年くらい経って、テル江に会ったという人の話を聞きました。テル江と仲のよかった中学の同級生で、東京の新宿で偶然会ったそうです。そのとき、テル江は若い男と腕を組んでいて、その森田とかいう男と同棲しているらしく、髪を染め、服装もわざと汚れが目立つような男物のシャツを着て、人が違ったように見えたと言います。住所を聞いて

も教えてくれないで、一ノ瀬の噂なんかも出なかつたようで、劇団に入って芝居をやっているという話をしたそうです。名前を聞いたことのない劇団で、それでも俳優になつたならテレビに顔が出るかも知れないと思い、あたしは暇さえあればテレビ・ドラマを見ました。あたしの心配が分つていながら、手紙の一つもくれなかつたなんて、あの子は一ノ瀬から受けたショックが余程ひどかつたのでしょうか。人が變つてしまつたとしか考えられませんでした。

——その後、一ノ瀬については全く消息を聞きませんか。

——聞きません。レントゲン技師の免状さえあれば、どこかの病院でも雇ってくれると言つてましたから、またどこかの病院に勤め、若い女を騙しているに違いありません。あいつは悪いやつです。女たらしで冷酷で無責任で、ほんとに悪いやつだと思ひます。たとえ一ノ瀬が犯人でないとしても、テル江が殺されるようになったもとをただせば、やはりあいつに騙されたせいだと思ひます。

森田の供述

——ほくがテル江と別れたのは大分前です。別れたといつても、夫婦だつたわけじゃありません。ほくも彼女も、世間体や功利的理由で偽装されているような結婚生活を軽蔑してました。そういう偽善には耐えられないし、愛情の情性にも耐えられない。だから、ほくたちは結婚という言葉を口にしなかつた。いっしょに暮す必然性がなくなれば、いつでも別れる約束で共同生活を始めたわ

けです。考えが少し甘かった気もしますが、とにかく真剣に愛し合い、ぼくたちは演劇に対する情熱で結ばれていました。彼女は女としても魅力があったし、そういうことも否定しません。最初はぼくのほうが積極的だったことも否定しません。

ぼくが彼女を知ったのは、渋谷のスナックです。彼女は店員でした。顔色が悪く、話しかけてもろくに返事もしないので、変な女だなと思ったことを憶えています。病的な暗い感じでした。でも、ぼくたちは割合早く親しくなりました。ぼくも家出していたから、それで話が合ったのかも知れない。彼女も家出をしていたことはあとで分ったことですが、劇団の仲間に彼女を紹介し、いっしょに生活するようになったのはそれからすぐでした。彼女のいたアパートより、ぼくのいたアパートのほうがいくらか上等だったので、彼女がぼくの部屋に移ってきたのです。そして彼女はスナックに勤め、ぼくも配達などのアルバイトをしながら、ある芝居を上演するために熱中しました。どうして彼女まで芝居に熱中したのか不思議ですが、芝居をやることと、愛し合うことは、ぼくたちにとってほとんど同じ意味を持っていました。

——彼女が家出をした理由を聞きましたか。

——もちろん聞きました。母親のせいです。一ノ瀬という男にも責任がありますが、ぼくはやはりおふくろが悪いと思う。彼女もおふくろのほうを憎んでいました。一ノ瀬については、騙された自分がバカだったというような言い方でした。彼女は一ノ瀬に妻子がいるなんて知らなかったし、もちろん、おふくろとの関係も知らなかった。だから真っすぐに彼を愛してしまっただけです。初めは無理矢理犯されたらしいけど、それでおふくろに話せないでいたら、おふくろのほうに気がついて、

いきなり一ノ瀬との関係を聞かされたそうです。彼に妻子がいることもおふくろに聞かされ、彼女は貧血を起してぶっ倒れ、それでもまだ一ノ瀬の言葉を信じていて、熊本から訪ねてきた彼の妻子に会うまでは、彼と結婚できると思っていたようです。

——彼女の母親と一ノ瀬との関係は、本当だろうか。

——ぼくは彼女にそう聞きました。一ノ瀬の妻子が上京したのは、彼女のおふくろが住所を教えたいせいらしかった。

——すると彼女の母親は、妻子が熊本に居ることを承知の上で、一ノ瀬と関係していたんですか。

——彼女の話を聞くと、そう考えるほかありません。ひどいおふくろです。彼女は父親の顔を知りません。物ごろのついた頃から、父親は家にいなかった。父親がいないままならそれでもよかったです。ところが、父親と呼ばねばならない男が三人も四人も代って現われ、彼女はそのたびに辛い思いをしたと言います。狭いアパート暮しに、知らない男がふいに割り込んでくるわけです。彼女がどんな思いをしたか想像できません。彼女はそんなおふくろから離れたいっしんで寄宿制度のある看護学校へ入り、苦学しながら看護婦になった。それならいっそ東京へ出てしまえばよかったのに、その頃、おふくろは男っ気が切れた時期らしく、彼女は親を捨てるような真似が出来ないで一ノ瀬がレントゲン技師をしていた市立病院に勤め、おふくろのほうは県立や私立の病院で付添婦をして、仕事柄、おふくろが一ノ瀬を知っているのは当たり前でも、まさか妙な関係になっているなんて考えもしなかったそうです。とにかく普通の親子じゃありません。おふくろは一種の色気ちがい

です。一人の男を娘と争つて、娘に敵わないと分つたら、娘と男の仲を裂くために、男の妻子を熊本から呼寄せている。彼女が家出をしたのはそんな過去を忘れたかつたせいで、芝居に熱中したのも、やはりそんな過去を忘れたかつたせいかも知れない。彼女は二度とおふくろに会いたくないと言っていました。

——彼女と暮すようになって、それからの話をつづけてください。

——大して話すことはありません。ぼくたちの共同生活はたった四ヵ月で終わりました。正月三ヵ月半くらいです。上演寸前まで漕ぎつけた芝居が、駄目になったからです。主宰者が交通事故で即死し、資金面で動きがとれなくなったのがいちばんの原因ですが、その前から劇団内部にあった感情的なもつれもあつて、劇団はあっさり解散しました。解散といつても、有名な劇団とは違います。主宰者のほかは名前の売れている俳優など一人もいなかったし、自然消滅のような解散でした。みんな野心を燃やし、さまざまな夢を抱いていたはずなのに、主宰者に死なれたらたちまち迷子になつたみたいで、ぼくなんかも道路に放り出された感じでした。

——彼女との生活が終つたのも、劇団が解散したせいですか。

——結果的にはそういうことになります。劇団が解散しても、ぼくたちの愛まで消える理由はなかった。ぼくたちは確かに愛し合つていた。愛が色褪せたとも思わなかった。でも、ぼくは彼女の愛情が次第に重くなつていった。今考えれば、彼女は不安だつたのかも知れない。多分そのせいで、彼女はあらゆる面でぼくを束縛し、自分も束縛されることを求めた。ぼくは何処へ行つても、例えば朝から晩まで働いて帰つた場合、その朝から晩までのいっさいの行動を報告しなければならな